飯田山常楽寺の本堂には木造十一面千手観音立像などがまつられています。町指定文化財

常楽寺手前に鎮座する水子地蔵に、掘ったばかりのタケノコが供えてありました

飯田集落の移住の歴史を教えてくれた田口さん

飯田（いいだ）

わが町のシンボリックな山・飯田山。その裾野に広がる飯田地区（大字小池）をぶらりと歩いてみました。 初夏の爽やかな風が運んでくれたのは、心がほっこりとなる出会いでした。

山からの移住の歴史

飯野小から御船方面に向かう国道443号沿いに、飯田山常楽寺の案内看板が見えます。そこから、南へ上り進んだ小池の一角が飯田地区です。

今から130年以上も前のこと。飯田山8合目にある常楽寺周辺には22戸の家が点在し、一帯は飯田村と呼ばれていました。 各家はその後、山を下りて現在の場所へ移住を始め、60年ほど前に最後の1軒が移り終えました。地区名の「飯田」は移住前の「飯田村」にちなむそうです。

「明治30年に最初に移住したのが私の家だと聞いています。 祖父たちは山を下りてからも山中の畑を耕し、白山神社や常楽寺をあがめ続けました」と教えてくれたのは、地区で合気道の道場「誠錬会」を主宰する田口幸明（たぐちゆきあき）さんです。

常楽寺は平安時代に開かれたとされる天台宗寺院。 天正16（1588）年にキリスト教徒だった小西行長が八代・宇土・益城の領主として入国すると、領民を改宗させるための弾圧が行われました。 常楽寺もその一つでしたが、信者たちはその弾圧に屈することなく信仰を貫いたと伝わります。 田口さんは「先祖たちにとって常楽寺は、心のよりどころだったのでしょうね」と思いをはせます。

よみがえる、常楽寺の石段

常楽寺は町の文化財に指定されている古刹（こさつ）です。 山門へと続く急な石段は、「乱れ積法」と呼ばれる珍しい作り。しかし、熊本地震や近年の大雨の影響で、石積みを支えていた山肌の土が流れるなどして、とても危険な状態でした。現在、改修工事が進められています。

石段の一つ一つを丁寧に修理しているのは、川内田（かわうちだ）地区から足を運んでいる、川内田工務店の築城哲郎（ついきてつろう）さんと林克洋（はやしかつひろ）さんです。

「大切な文化財の修理にあたり、町史をひもとき常楽寺の歴史を勉強し

常楽寺の境内で見つけたシャガの花。アヤメ科の多年草です